

P1-29

当院の大腸コロノグラフィー (CTC) について

渡邊義親

JCHO山梨病院 放射線部

<背景>当院で行っている大腸内視鏡検査は、外来・検診を含め年間約1800件の大腸内視鏡検査を行っていて、現在予約は1カ月待ちの状態である。内視鏡不成功例は年間約10例でその場合は空気を送気し、粗大病変がないことをCTにて確認していた。

<目的>内視鏡が困難な患者に対しても精度の高い大腸検査が行えるよう炭酸ガス送気装置を導入し、より精度の高い大腸コロノグラフィー(CTC)が当院でも可能となったので症例を元に使用経験を報告する。
<方法>CTCの前処置は高張法(ブラウン法)を採用し、検査前日から大腸・CT用検査食(FG-two)をとり、毎食後にCTC用バリウム製剤を飲んでもらう。使用機器はPHILIPS社製Ingenuity Core64列CT、杏林システム社製炭酸ガス送気装置を用いて検査し、AZE Virtual Place Fujinにて画像解析を行った。

<結果>炭酸ガス送気装置を用いることにより痛みが少なく大腸を十分に伸展させることが可能となり患者の負担も軽減された。また、大腸内の残渣(残液・残便)が残る症例もあったがCTC用バリウム製剤を用いていることにより、画像解析にて消し去ることが可能で診断上問題になることはなかった。

<課題>炭酸ガス送気装置の送気量を一定にしているが人によっては小腸まで描出されてしまい画像解析が大変な症例もあった。CTC用バリウム製剤を飲み忘れた症例では残渣の処理が出来ずうまく描出できない場合もあった。今後は検査数を増やし、最適な前処置、適正なガス量を模索し、より精度を高め大腸病変の発見に繋げられるよう尽力していきたい。

P1-30

短期間に同一患者(の心臓)に対して行われた画像検査(心カテ・心エコー・RI・MRI・CCT)の紹介

近藤義信、三浦良見、後藤幸二

JCHO南海医療センター 放射線部

【概要】AMIが疑われ緊急心臓カテテル検査となった患者で、seg9の完全閉塞のみであったためAMIの診断に至らず、その後の負荷心筋シンチで前壁の梗塞が判明した症例について。

最終的に、「脳梗塞の発症によりカテコラミン心筋症・冠動脈の攣縮が起り、それによって失神や洞停止、VTを起こしたものと考えられる」と診断された。

この診断に至るまでに以下の画像検査が行われた。

- 1 心臓カテテル検査：AMIの診断
(脳梗塞疑いのための頭部MRI)
 - 2 心臓エコー：心臓の構造や血液の状況
 - 3 二核種同時収集心筋シンチ：心筋虚血
 - 4 MIBG心筋シンチ：交換神経障害
 - 5 MRI：心筋の状態
(ヘッドアップ ティルト試験)
 - 6 再度の心臓カテテル検査：VSA(攣縮性狭心症)の有無
 - 7 CCT：虚血が判明したLADseg9の灌流域と虚血部位の確認
- いずれも心臓の画像であり、比較的短期間(50日間)で撮影されたものである。
過去に経験のない事例であったため、時系列で画像を紹介する。

P1-31

アキレス腱のX線撮影による急性冠症候群(ACS)患者における家族性高コレステロール血症(FH)の有病率調査

志水祐太¹、中尾健人¹、井上義晴²、中村伸一¹¹JCHO人吉医療センター 画像診断センター、²JCHO天草中央総合病院 放射線科

【背景】北欧諸国では国策としてFHの早期発見・治療に取り組み、オランダにおけるFHの診断率は70%に上るといふ。しかし、日本ではFH患者が推定30万人とされているが、診断率は1%未満とされている。FH患者の死因の1つとして冠動脈疾患が挙げられ、男性で66%、女性55%と半数以上が冠動脈疾患で死亡しており、若年での死亡が多いことが特徴である。FHの診断基準の1つにX線のアキレス腱撮影が有用との報告がある。

【目的】ACS患者におけるFHの有病率調査。

【方法】循環器内科受診のACSを疑う患者81人(男性51・女性30)を対象とし、FH診断用アキレス腱撮影マニュアルに沿って撮影を行う。

【結果】アキレス腱肥厚あり8人の平均値は12.2cm、肥厚なし73人の平均値は7.28cm。LDL-C値が180mg/dl以上だった症例14人。冠動脈疾患がありPCIを施行した症例63人。FH症例は4人であった。FH4人は全員PCI歴があり、内3人はLDL-C値が180以上だった。LDL-C値が180mg/dl以上の症例と180mg/dl未満の症例のアキレス腱肥厚の平均値の差は0.01cm(p=0.27)。

【考察】FHと診断された4人の中には、肥厚が規定の値に僅かに足りない者もいた。その方は、10年以上コレステロール管理を行っていることが分かり、肥厚因子としてコレステロール沈着があることを考えると、治療を継続して行っていたことで肥厚度合いが抑制され、今回の肥厚基準を僅かに超えることが無かったと推察される。

【結語】北欧諸国に比べ日本のFH診断率は低いと、ハイリスク患者を見つけるためにも今後、継続して循環器内科より検査を行っていく方針となった。

P1-32

演題取り下げ